

宇和島市吉田町の孤立地区での豪雨災害時の危機対応に学ぶ

徳島大学 正会員 ○中野 晋 蔣 景彩 湯浅 恭史

1. はじめに

平成 30 年 7 月豪雨では愛媛県内で死者 31 名（関連死 4 名含む）、安否不明者 1 名の深刻な被害となった。その中でも宇和島市では多数の斜面崩壊などにより、13 名（関連死 2 名含む）が犠牲になっている。7 月 5 日から 8 日までの雨量は宇和島（気）で 381.5mm、吉田（県）で 453.0mm、宇和（気）で 539.5mm と宇和島市北部から西予市南部で総雨量 500mm 前後の記録的な大雨となり、宇和島市や西予市などで多数の土砂災害が発生した。

特に図 1 の通り、7 月 7 日 5 時～8 時には吉田で 3 時間に 171mm の猛烈な雨となり、この時間に宇和島市吉田町法華津峠付近（旧吉田町と旧宇和町の境界）と宇和島市高串付近（旧吉田町と旧宇和島市の境界）の国道 56 号沿いで斜面崩壊が発生し、国道 56 号が全面通行止めとなった。

国土地理院の判読によると、吉田町周辺では図 2 の赤丸●で示されるように至る所で斜面崩壊が発生した他、短時間豪雨により、河内川などの中小河川が氾濫し、吉田町の各所で孤立集落が発生することとなった。その結果、土砂による生き埋めなど救出が急がれる状況でも交通遮断により、地区外からの支援がない中、住民や消防団など自助、共助による緊急対応がなされた。本報では大きな被害を受けた吉田町の白浦集落、南君集落の緊急対応について住民、消防団の方から伺った内容をもとに、大災害発生時の自助・共助の役割と課題について考察する。

2. 宇和島市吉田町の被害

吉田町では図 2 に示す集落で計 11 名（南君 3 名、白浦 4 名、法花津 1 名、奥浦 1 名、沖村 1 名、立間 1 名）が土砂災害により犠牲になっている。時間雨量 50mm を超える豪雨の中、早朝に斜面崩壊が発生したため、事前避難を行うことが難しかったことが一番の要因と考えられる。6 日の 4 時 25 分に宇和島市は土砂災害警戒情報を土砂災害の危険性のある地区を対象に発表しているが、図 1 でもわかるように 6 日の日中から 7 日 4 時頃までは多くても時間雨量 10mm 前後の小康状態となっていたため、あまり警戒していなかったという証言を多く聞いている。宇和島市では各地で土砂災害が発生し始めた 7 時に市内全域に避難勧告を発令している。

3. 住民等による危機対応事例

白浦集落では消防団員、農業団体（白浦中山間集落協定代表）に、南君集落では自治会長にインタビューした。証言内容をもとに住民等による対応状況を次に示す。

(1) 白浦集落

この集落では農業振興のための互助組織である中山間集落協定の団体（以下、中山間と呼ぶ）が発災当日に建設機械のレンタル会社から自主的に重機を借り出し、住民自らが細街路の整備、住宅の泥だし、農道の復旧

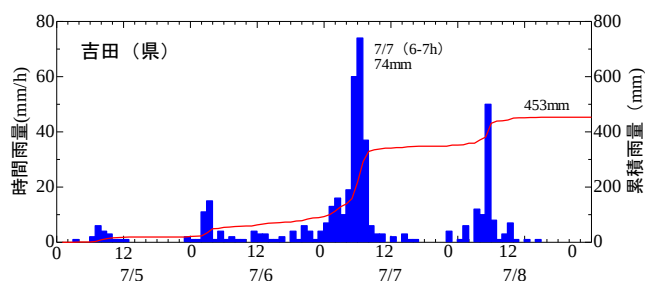


図 1 降水量の時間変化（宇和島市吉田）



図 2 犠牲者と土砂災害の発生箇所

（国土地理院平成 30 年 7 月豪雨崩壊地分布図に加筆）

にあたった。中山間では災害の大きさから、行政によるインフラ復旧には時間がかかるため、住民自らが早期復旧を図る必要があると判断して、代表を含む3名が7日昼過ぎに西予市宇和町にある建機リース会社に赴き、トラック3台、パワーショベル2台を借り出して作業に入った。中山間ではこれまでも農業振興のために農水省から給付されている補助金の一部をプールして、緊急時の農道整備などを行っている。また、構成員の中には建設会社で勤務し、重機を扱える人が一定程度いるという強みを活かして、ピーク時には小型の建設機械も含めて約20台の重機とほぼ同数のダンプトラックを借りて多くの住民の協力を得て、作業に当たった。7月末までは主に路地や小河川に堆積した泥の除去、住居内の泥だしなどを行い、それ以後11月末頃まで、崩壊した農道整備を実施した。7月末に中山間の予算が無くなりかけたが、宇和島市からリース代、燃料代、人件費などの最小限度の必要経費が認められ、続けられることになった。

(2) 南君集落

7日6時半頃に裏山が崩壊した。山際の住宅が土砂とともに**写真2**の左側の住宅まで流出した。家族3名は避難するために車に乗った直後に土石流に巻き込まれたと推定されている。災害発生直後に、立目地区自治会長を含む数名が駆け付け、救出にあたった。現場では多量に水を含んだ土砂が海岸沿いの県道付近まで1m以上堆積し、その上を流出した竹が大量に覆っている状態であったため、**写真2**の右側の住宅の雨戸を外して土砂の上に敷いて接近した。南君地区周辺では**図2**の通り、多地点で斜面崩壊があり、孤立状態となった。宇和島市の消防士が船を使って救助に到着したのは11時前頃で、それまでは住民だけで救助活動が行われた。

幸いにも孤立地区内に2社の建設会社があり、重機が近くにあったこと、住民の中に重機を使用する技術者がいたことで、消防や警察が来る前に建設会社の重機2台を使って土砂やがれきの除去を行っている。また、**写真2**の右側の住宅からは負傷した高齢者が救出されたが、住民の漁船で多量の漂流物が浮かぶ海域を宇和島市内の救急病院まで搬送し、救急対応が行われた。

4. まとめ

いずれの集落でも他地区から孤立した中で、迅速に重機や漁船を使って、人命救助や復旧にあたることできている。リーダーや重機を扱える技術者が地区内にいたこと、地区内の男性のほとんどが消防団員または消防団OBであり、災害時の対応に習熟していることなど、コミュニティとして高い防災力を維持していた点が評価される。消防団員や建設技術者の減少が大きな問題となっているが、地域防災力を維持する上でこうした能力を有する人材の確保と育成が重要であることを改めて感じた。

謝辞：本調査は河川財団河川整備基金「平成30年7月西日本豪雨災害調査」（代表：岡山大学・前野詩朗教授）及び文部科学省科学研究費特別研究推進費「平成30年7月豪雨による災害の総合研究」（代表：山口大学・山本晴彦教授）の研究助成により実施された。また、インタビュー調査では宇和島市消防団吉田方面隊第4分団員、立目地区自治会長、白浦中山間集落協定代表の協力を得た。ここに記して深謝いたします。



写真1 白浦地区の斜面崩壊現場（11月9日撮影、この崩壊により、4名が犠牲になった。）



写真2 南君地区の家屋の被災状況（12月8日撮影、避難中の家族3名が犠牲になった。）